

『般若心経』をめぐる諸問題

——ジャン・ナティエ氏の玄奘創作説を疑う——

石井 公成

1. はじめに

ジャン・ナティエ (Jan Nattier) 氏は、梵文『般若心経』は、漢訳の『大品般若』から抽出して作成された漢文経典を知っていた玄奘が、インドで梵語をしっかりと学んだ後、編集上の小さな変更をおこなって梵文に訳した可能性が高いとする論文を 1992 年に発表し、話題となった¹⁾。ナティエ氏は、初期大乘仏教に関する研究を数多く発表しているすぐれた研究者であり、上記の論文の場合も『般若心経』の特異さを多数指摘するなど、有益な面を含んでいる。ただ、日本では既に知られていた点も多いうえ、玄奘が梵文『心経』を作ったとする議論は行き過ぎであって誤りであることは、福井文雅氏や原田和宗氏が詳細に指摘した通りだ²⁾。他にも、欧米の研究者を含め、ナティエ説に批判的な研究者は少なくない。ただ、直接反論する英語の論文が書かれていないため、この方面の専門家でない欧米の仏教学者や仏教に関心のある一般読者の多くは、『心経』については今でもナティエ説を通説と見て論文を参照しているようだ。そこで、本稿では、これまでの批判とは異なる観点からナティエ説の問題点をいくつか指摘したい。

2. 「照見五蘊皆空」

ナティエ氏は、仏教研究者は『心経』になじみすぎているため、違和感を感じないでいるが、『心経』(小本)の梵文テキストは、般若経典としては異質すぎると思う。たとえば、巨大化してゆく般若経典の発展傾向に反して異様に短く、しかも仏が登場しないなど経典の形式になっておらず、般若経典とは関係が薄い観音菩薩が主人公となっていて、マントラで唐突に終わっており、用語や語法も他の梵文般若経典と一致しない部分が多いうえ、梵文として不自然な表現もあって漢訳経典のみと対応している部分もあるうえ、インドで大本『心経』の注釈が造られた時期は小本の漢訳より遅い、などの点だ。

このため、ナティエ氏は、漢文『心経』は漢訳『大品般若』を抽出して中国で作られ、玄奘がそれを多少編集して梵語に訳した結果、インドで知られるようになったと論じた。その論拠のうち、特に重要なのは、「梵文の『心経』を漢文からの翻訳と理解する方が、その逆よりも簡単である」(p. 178)³⁾という点だろう。

しかし、漢文の『心経』を梵文にすると現存のテキストのようになるだろうか。実際には、むしろその反証となる例がいくつも見られる。たとえば、「照見五蘊皆空(五蘊はすべて空であると智慧によって見抜いた)」の部分がある。

ナティエ氏は、論文の冒頭で、小本は、序・核心部分・結論という三つの部分から構成されていると述べた後、梵文テキストの英訳を示している。その英訳のうち、「照見五蘊皆空」を含む冒頭部分はこのように訳されている。

The *bodhisattva* Noble Avalokiteśvara, practicing [his] practice in the profound Perfection of Wisdom (*prajñāpāramitā*), looked down (*vyavalokayati*). [And] he regarded the five *skandhas* as empty. (p. 155)

これは実は、梵文テキストの翻訳というより、漢文『心経』の英訳に近い。すなわち、ナティエ氏は梵文テキストと称するものを、漢訳に近い形で英訳して示しておいたうえで、「梵文『心経』を漢文からの翻訳と理解する方が、その逆よりも簡単である」と述べているのだ。こうした例はほかにいくつもある。

そもそも、様々な写本や校訂版がある梵文テキストのうち、この英訳の元になったのは、どのテキストなのか。ナティエ氏がそのことを明記していないのは問題だろう。ここでは広く読まれ、諸国の研究者に大きな影響を与えた Max Müller と Bunyiu Nanjio の校訂テキスト⁴⁾をあげておこう。表記は通行の形に改めた。

āryāvalokiteśvaro bodhisattvo gambhīrāyāṃ prajñāpāramitāyāṃ caryāṃ caramāṇo vyavalokayati sma | pañca skandhās tāṃś ca svabhāvaśūnyān paśyati sma | (p. 48)

この Müller と Nanjio による校訂テキストに限らず、現存する『心経』の梵文写本では、いずれも *svabhāvaśūnyān* (自性空) となっていて、*svabhāva* (自性) の語が入っているにもかかわらず、ナティエ氏はこれを無視し、*svabhāva* に相当する訳語が無い漢訳に合わせる形で訳しており、注記もしていない。そのうえ、漢文『心経』で上の部分に続いていながら梵文テキストに見えない「度一切苦厄」の句については、論文中でまったく触れていない。だが、梵文諸本とチベット語訳の様々な異本には「度一切苦厄」に相当する語が見えないこと、また、観音親授本でも「度一切苦厄」に相当する句は無く、「娑嚩自娑嚩引性戍儻焰」とあって、「娑

(28) 『般若心経』をめぐる諸問題 (石 井)

囉婆囉」(svabhāva)が入っている理由について説明しておくべきだろう。

大本の漢訳では、法月訳は「照見五蘊自性空」、智慧輪訳は「照見五蘊自性皆空」、法成訳は「觀察照見五蘊体性悉皆是空」、施護訳は「五蘊自性皆空」となっている。これらはいずれも svabhāva を「自性」と訳しており、しかも、「度一切苦厄」に当たる句は無い。例外は般若共利言訳であって、玄奘訳と同様に「照見五蘊皆空」とし、「離諸苦厄」と記している。このため、般若共利言訳は、玄奘訳が基づいたのと同じ系統の梵文テキストに基づいたか、玄奘訳を尊重し、それに合わせて漢訳したということになる。

ここで重要なのは、すべての漢訳は、「五蘊は空であると見抜いた」というひとまとまりの動作として訳しているのに対し、梵文テキストの場合は、どの版に従うにしても、「五蘊がある。そして、それらを空と見た」という二段階の構成になっていることだ。これは、(1) vyavalokayati の語はどこまでかかるのか、(2) svabhāva をどう解釈するか、(3) paśyati の主語を誰と見るか、で意見が分かれた場合も変わりが無い。実際、ナティエ氏より以前の研究者たちは、上の三点については解釈がそれぞれ微妙に異なっているものの、ナティエ氏と違い、梵文に従って二段に分けて訳している場合が多い。

たとえば、先の梵文に対する Max Müller と Bunyiu Nanjio の英訳はこうだ。日本語訳は、すべて筆者による。

Avolokiteśvara [*sic*] . . . thought thus: 'There are the five Skandhas, and these he considered as by their nature empty (phenomenal).' (p. 48)

観自在は……次のように考えた。「かの五蘊がある。そして、それらをば、彼はその性質上、空虚（なる現象）とみなした」。

こうした区切り方の場合、paśyati の主語を観音と見ると文の流れが不自然になるためだろうが、白石真道は、Müller はその主語を観音とは別人とみなして he と訳していると述べ、白石もそれに賛同して世尊のことと解釈している⁵⁾。

次にナティエ氏が論文冒頭で名をあげた Edward Conze の訳は次の通りだ⁶⁾。

He looked down from on high, He beheld but five heaps, and he saw that in their own-being they were empty. (p. 77)

彼は高みから見下ろしたところ、五つの集まりしか目撃しなかった。そして、彼は、その本質においてそれらは空虚であると見た。

ナティエ氏は、日本語の研究論文も活用しているが、日本人研究者の『心経』の訳は、漢訳に合わせて一段で訳している人もいるものの、広く読まれている中

村元・紀野一義訳⁷⁾が「存在するものには五つの構成要素があるとみきわめた。しかも、かれは、これらの構成要素が、その本性からいうと、実態のないものであると見抜いたのであった」としているように、二段に分けている人の方が多い。

ここで、この部分の梵文と漢訳のどちらが元であるかについて考える手がかりとして、漢訳の手順にしたがって梵文を訳してみよう⁸⁾。まず、梵文が読み上げられ、連声をどう切るかが示された後、単語を個々の漢字に置き換える作業だ。

vyavalokayati sma pañca skandhās tāṃś ca svabhāvaśūnyān paśyati sma
照 了 五 蘊 此等而 自性 空 見 了

vy-ava-√lok は注意深く観察する意であって、ここでは般若の智慧によって観察するのであるから、「照」の字を用い、√paśの方は一般的な見る動作に用いられる語であるため、「見」としておく。次に、「了」などの助辞や文脈上言わなくてもわかる「此等」の語などは省くと、「照五蘊而自性空見」となる。しかし、動詞である「見」が目的語の後に来るのはおかしいし、「而」がここに入ると語調がかんばしくない。語順を訂正して四字句に整えるなら、「照於五蘊，見自性空」などとしたいところだ。「照五蘊」の部分を生かし、語調を考慮するなら、「照五蘊，見性空」などとなろう。空という点を強調すると「見皆空」となる。これでも語調が十分なめらかでないとなれば、「塔を建て、寺を立てる」と言う際、漢訳經典でも中国の仏教文献でも「建立塔寺」などと表記する例が多いように、「照」と「見」、「五蘊」と「皆空」とを合わせてしまえば、「照見五蘊皆空」というフレーズができあがる。落ち着きの悪い「照五蘊而見自性空」を「照見五蘊自性空」と並べ変え、さらにリズムを考慮して「照見五蘊皆空」と改めることもできよう。

「照見」という語は、漢訳經典では、『華嚴経』が「菩薩淨眼之所照見」(T9, 497b)と説き、『仏所行讚』が「無遠近天眼悉照見」(T4, 51b)と説いているように、智慧や特別な力によって見通す場合によく用いられている。このため、細かく観察するというニュアンスを含む vyavalokayati の訳語としてふさわしい。ただ、「見」の方は、対応している paśyati と同様、見ることを意味する一般的な言葉であるものの、原田氏によれば、paśyati は般若經典では、「菩薩は～を見ない」といった否定の形で用いられることが多いという⁹⁾。

Prajñāpāramitā-hṛdaya は、そうした意味で確かに般若經典としては異質だが、名が示すように、そもそも經典ではない。般若經典とは縁遠い観音を主人公とし、マントラを強調していたうえ、現実にはお守りとして用いられていた場合が多い

(30) 『般若心経』をめぐる諸問題 (石 井)

ことを考えれば、そうした立場の人が、威力ある真実語 (satya-vacana) にほかならない般若のマントラを柱とし、観音信仰や般若経典その他の素材を利用して作りあげた混成物と見るべきだろう。

そうした様々な要素の例をあげると、vyavalokayati... paśyati sma という形は、般若経典には見えないものの、『ラリタ・ヴィスタラ』のうち、生まれたばかりの菩薩 (釈尊) が世界を観察する場面には、vyavalokayati sma... paśyati sma の形をとり、しかも、vyavalokayati の目的語が目的格の名詞ではなく、『心経』同様に iti を伴わない主格語尾の名詞が主語となっている個所があると原田氏は指摘している¹⁰⁾。『心経』は、観音の修行をこうした描写と重ね合わせているのだろう。

いずれにせよ、それまでの漢訳般若経典に全く見えない「照見五蘊皆空」という漢文の句を梵文に訳すとしたら、上で見たような二段階の動作を示す梵文にするだろうか。「五蘊はすべて空であると観察した」などといった一段の文に訳すのが自然ではなからうか。ちなみに、「五蘊皆空」も「蘊皆空」も、漢訳においては『心経』以前の用例は無いばかりか、「五蘊○空」「五蘊○○空」という表現も『心経』以前の漢訳経論には見られない。

不思議なのは、基の『般若波羅蜜多心経幽賛』が、この個所について、「経曰。照見五蘊等皆空」(T33, 535b) として「等」を付けて引いていることだ。このためか、法相宗の伝統を伝える法隆寺では、今日でも「照見五蘊等皆空」に作る版を毎朝読誦している。慈恩は、梵語は自負するほどは出来なかったようであり、『心経』の場合も梵本には言及しておらず、見ていないようだが、玄奘の一番弟子である基が、慈恩寺に刻されているテキストと異なる本文を用いるのは疑問だ。

梵語に通じ、『心経』についても梵本を見たうえで注釈『般若波羅蜜多心経賛』を著した円測の場合も、「五蘊皆空」の句について「或有本曰、五蘊等皆空」と述べ、「五蘊等」に作るテキストもあることを紹介し、「梵本を検勘するに、『等』の言有り」という理由で「等」の語が入った方を正しい訳としている (T33, 544c)。現存する梵語の諸本には、「等」に当たる ādi のような語が入ったものはないため、あるいは skandhāḥ や tāṃś などと複数形になっている点を指しているのかもしれない。『大般若経』には「以色蘊等自性皆空」(T5, 552c) という表現があるが、この一例だけであるうえ、四字句にするために「等」を入れたように見える。

なお、円測も基と同様、「照見五蘊皆空」の部分における漢訳の一段構成と梵文テキストの二段構成の違い、svabhāva の語の有無などについては、何も語っていない。円測が注釈したのは、漢訳としての『心経』、それも中国第一の権威であっ

て太宗に尊崇されていた玄奘の訳なので遠慮したという面もあるかもしれないが、梵文を見ていたなら、大きな違いには触れていても良さそうに思われる。

興味深いのは、法蔵『般若心経略疏』だ。『華嚴経』の注釈でも時に梵本に言及する法蔵は、「照見五蘊皆空」の部分解釈する際、「謂達見五蘊，自性皆空，即二空理，深慧所見也（五蘊は自性皆空なりと達見すと謂うは，即ち二空の理にして，深慧の見る所なり）」(T33, 552c)と述べており、svabhāvaが入った梵文を考慮しているようにも見えるが、「自性皆空」は漢訳において良く用いられる慣用句であり、ここは四字句にするためにそうした慣用句を用いたとも考えられる。

3. 「真実不虛」

その法蔵を含め、基も円測も現行の梵文とは異なる解釈をしている個所がある。玄奘が漢文の『心経』から梵語へ訳したとすると、問題になる個所だ。それは、『心経』の末尾の「真実不虛故説般若波羅蜜多呪」の部分にほかならない。基と円測と法蔵は、いずれも「真実不虛」で切り、「故説般若波羅蜜多呪」と続けているが、現行の梵文は、多くの写本では、

satyam amithyatvāt, prajñāpāramitāyām ukto mantrah.

となっており、「真実である。虚妄でないからである」という特異な理由句となっていて、そこで切れ、続いて、「般若波羅蜜の意味で（の中で）マントラが説かれる」と述べられている。prajñāpāramitāyāmというLocativeの形をどう解釈するかは諸説があるが、satyam amithyatvātという部分については、小本・大本とも、ほとんどの梵文写本がそうなっている事実は無視できない。ところが、ナティエ氏は、この個所の梵文を訳す際、次のように英訳している。

Because it is true, not false (satyam amithyatvāt [sic]), the mantra is spoken in the Perfection of Wisdom. (p. 156)

これは、「真実不虛」で切って「故説～」と続ける解釈に従って理解した漢訳『心経』に合わせた英訳だ。しかも、先にはcaを軽視して[And]とする苦しい処理をしていたように、ここでは“sic”を入れ、“satyam amithyatvāt”という梵文は誤りと見ている。ナティエ氏は、この部分について説明した個所でも、「真実不虛（真実であり、虚妄でない）」という表現は漢文として自然であるのに対し、“satyam amithyatvāt”という表現は多くの読者を当惑させていると述べるに留めている (p. 177)。しかし、上の梵文を玄奘が「真実不虛故説般若波羅蜜多呪」と訳したとこ

(32) 『般若心経』をめぐる諸問題 (石 井)

ろ、中国人読者が「真実不虛」で切り、「故」は次に続く「説般若波羅蜜多呪」にかかるものと解釈した、あるいは「真実不虛故」で切り、「真実であって虚妄でないから」の意と受け取った、という事態は考えられるが、「真実不虛故説般若波羅蜜多呪」という漢文を、上記のような特異な梵文に訳すだろうか。そのうえ、漢文では「般若波羅蜜多呪を説く」という単純な形となっており、梵文とは文脈が全く異なる。

陀羅尼について「真実不虛」、ないしこれに類似した表現を用いる例は多いが、*satyam amithyatvāt* という理由句の形にすることは、般若經典を含めた他の梵文經典では発見されておらず、特異な用法であることは、原田氏が指摘している¹¹⁾。「真実」と「不虛」、ないし「如実」と「不虛」の組み合わせであれば、漢訳經典では、陀羅尼經典以外でもしばしば見られる慣用句だったようだ。たとえば、『涅槃經』でも、「即是真実、非虚妄也」(T12, 458c)とある。その「如実不虛」の用例の中できわめて重要と思われるのは、菩提流支の著作と推定されている『金剛仙論』の文句だ。如来は「真語者」(*satya-vādin*)であるという菩提流支訳『金剛般若經』の經文(T8, 754c)を説明するため、「須菩提、如来是真語者、明如来是一切智人、証得果頭十力無畏諸功德等、如已所証、還為人說、如実不虛。故云真語者也」(T25, 840b)と述べており、「一切智人」であって様々な功德を証得した如来の説法が「如実不虛」と言われている。ここは四字句の流れから見て、「如実不虛。故～」であって、*satyam amithyatvāt* という形ではないが、威力のある真実語について、こうした表現が使われていることは見逃せない。『心経』末尾に見えるマントラの絶大な威力は、如来が般若經典において説いた般若波羅蜜多の教えが「真実語」であることによって保証されているからだ。

このため、「真実不虛故説般若波羅蜜多呪」であれ、*satyam amithyatvāt, prajñāpāramitāyām ukto mantraḥ* であれ、この部分こそが『心経』中央の教説部分と末尾のマントラをつなぐ決定的に重要な部分ということになるが、この部分は、梵文→漢文、漢文→梵文のどちらの可能性が高いだろう？ 先ほどの「照見五蘊皆空」のように梵文を逐語的に漢訳してみよう。

sarvaduḥkha-prasamanah, satyam amithyatvāt. prajñāpāramitāyām ukto mantraḥ
一切 苦 能除 真実 不虛故 (於)般若波羅蜜多(中) 説 呪

「除除一切苦、真実不虛故、説於般若波羅蜜多呪／説般若波羅蜜多呪中」→「能除一切苦、真実不虛故、説般若波羅蜜多呪」

『心経』が特殊であることは事実であり、その様々な例をあげた点では、ナティ

エ論文は意義がある。しかし、「梵文の『心経』を漢文からの翻訳と理解する方が、その逆よりも簡単である」という主張は誤りである。また、自説に都合の悪い個所を無視しているうえ、梵文を自説に都合良く英訳している個所も複数見いだされる。このため、ナティエ説は論証としては成立しない。

-
- 1) Nattier 1992.
 - 2) 福井 2000, 原田 2010.
 - 3) ナティエ氏の引用は、注(1)論文の頁で示し、日本語訳は筆者による。
 - 4) Müller and Nanjio 1884.
 - 5) 白石 1940.
 - 6) Conze 1958.
 - 7) 中村・紀野 1960: 11.
 - 8) 漢訳の手順については、『心経』の例を含め、船山 2013 参照。
 - 9) 原田 2010: 91.
 - 10) 原田 2010: 99-101. なお、同書では、玄奘が訳した梵文テキストには svabhāva はなかったものと推測している。
 - 11) 原田 2010: 340.

〈参考文献〉

- Conze, Edward. 1958. "The Heart Sutra." In *Buddhist Wisdom Books*, 77-107. Northampton: George Allen & Unwin.
- Müller, Max, and Bunyiu Nanjio, eds. and trans. 1884. "Pragñā-pāramitā-hridaya-sūtra." In *Ancient Palm-Leaves. Anecdota Oxiensia, Aryan Series*, Vol. 1, pts. 1-3, 47-59. Oxford: Clarendon Press.
- Nattier, Jan. 1992. "The Heart Sūtra: A Chinese Apocryphal Text?" *The Journal of the International Association of Buddhist Studies* 15: 153-223.
- 白石真道 1940 「般若心経略梵本の研究」『日本仏教学協会年報』12: 304-268.
- 原田和宗 2010 『「般若心経」成立史論——大乘仏教と密教の交差路——』大蔵出版.
- 福井文雅 2000 『般若心経の総合的研究——歴史・社会・資料——』春秋社.
- 中村元・紀野一義（訳注）1960 『般若心経・金剛般若経』岩波書店.
- 船山徹 2013 『仏典はどう漢訳されたのか——スートラが経典になるとき——』岩波書店.

〈キーワード〉 偽経, 玄奘, 真実不虛

(駒澤大学教授, 博士(文学))